(1) サルケの利用の動機は、「燃料の不自由さの解消」という文脈で語られることが多い[36]。いわば「仕方なく」利用されたものであり、燃料としての価値は相対的に低いという一般的な認識がある。しかし使用した人の中には、「サルケも良かったよ」（大曲⑯）、「結構いいんだよ」（大曲⑰）、「すごくいいものだった。今考えてみれば」（大曲⑱）と評価する人たちがいた。言うまでもないが、産業的な資源評価と同じ視点からのみ評価を下すことはできない。当事者の視点に立った価値付け・意味付けを大切にしたい。薪ストーブが普及した時代に、逆にサルケを利用し始めたという事例（㉜土手内）があったが、同様の事例は津軽地方にもみられる。石油ストーブが普及した現在でも、薪ストーブを好んで使用する人々がいるが、それが一概に燃料の節約という動機に基づくものであるとは言えないことと同様、サルケを伝統的に利用してきた人々にとって、合理性（経済性）の追求だけではない別の感覚もまた働いていたのではないか。「燃料の不自由さの解消」という一側面を強調することで、庶民のくらしの営みのなかにあった、ものごとに対する表面的にはとらえがたい感覚を見失いかねないことに注意したい。　［以上 3(2),(3)D 参照］

(2)今回の調査地域（下北地方３集落）では、サルケの採掘の目的は第一に土地改良であり、燃料としては副次的な位置づけにある（二次産物である）と語る人が多くみられた。津軽地方では、燃料の獲得が第一の目的であると語る人々が多いことと対照的である。開墾の歴史的な経緯（開墾された時代）、海岸や山林への近さなどの地理的環境的要因、近隣の集落間の人や物の関係など、さまざまな事情が認識の違いを生んでいると考えられる。また、津軽地方では聞かれない「シクボ」（泥炭）という語が、土地改良を説明するなかで用いられる事例が複数あった。土地改良にともなうシクボの利用（または認知）は、五戸町や上北地方で報告されており、筆者自身も現地で証言を得ている[37]。今回の調査地域に住む人々がサルケの利用を語る際に、土地改良を第一の主題とすることや、燃料としての泥炭の呼称にはサルケという用語を用いながら、土地改良を説明する際にはシクボという方言が用いられる場合がみられることは、南部地方のシクボ開墾の経験が伝えられている可能性を示唆しているのではないだろうか。下北地方における稲作やりんご栽培などは、津軽地方からの入植者たちによって確立されていったといわれている[38]が、サルケ（泥炭）の利用や泥炭地の改良法については、津軽地方の入植者がもたらした経験にのみもとづくものであると考えることは適当だろうか。今後は、南部地方のシクボ（泥炭）利用について調べをすすめ、サルケの利用に関するひとびとの経験がどのように伝えられ、共有されていったか確認したい。　［以上 3(1),(5)E,(3)C 参照］

(3)県内の自治体史や民俗誌において、サルケの採取について述べたものの多くは、掘り起こす作業のみに焦点をあわせ、男性を作業の主体として描く。確かにその作業に限れば、おおむね男性によっておこなわれた傾向があり、当事者のなかには「オナゴにはできない」「オナゴはやらない」という認識もみられる。しかし本稿で確認できたとおり、サルケの採取とは、真っ直ぐに切るための縄張りやタヂ入れ、受け渡しや運搬、積み重ねなどを含めた一連の工程であり、掘り起こす行為だけではない。比較的体力を必要としない作業については、女性や子どもの協力があったことに留意したい。無数の関係のなかで織り上げられる事象を有機的に捉えたい。　［以上 3(5)D E-2,(6)(7)参照］

(4)端的でわかりやすい叙述は、逆にサルケと人々との関わりの多様なありかたを見えなくしてしまう。たとえば、下北地方のサルケについて「冬期間の暖房用燃料として使用した」[39]「燃料の不自由なときには，（中略）冬期間のストーブの燃料として使ったこともあった」[40]と自治体史は描く。サルケが「冬季」の「暖房用」燃料であると定義するものは、津軽地方のサルケについて述べた書物にも多い[41]。しかし、一年を通じた日常的な炊事をはじめ、冬季の暖房にとどまらないサルケの多彩な利用やそれにまつわるさまざまな「できごと」については、地域住民が語る通りである。サルケをモノとして定義するのではなく、人との関係のなかでサルケが持っていた／持っている多様な意味をとらえたい。本稿で、話者の語りをできるかぎり活かすかたちで、可能なかぎり省くことなく収録するようこころがけたのは、冗長に感じられるかもしれないがそのためでもある。また、話者の発話行為をそのまま文字化することで、なまのテクスト（データ）に対する多様な読み方の可能性を、筆者以外の人間（読み手）に対しても開くことができ、それがどのような文脈でおこなわれた言説であるか検討することもできる。これは記録としての正確さにもつながる。調査を通じて、記録のありかたと示しかたについて学習し、工夫したい。　［以上 3(9),(11)参照］

謝辞

調査にあたり、地域にお住まいの多くの方々のご協力を賜りました。話者の方々はもちろんのこと、話者を紹介してくださった方々に心から感謝を申し上げます。むつ市から資料を提供していただきました。西郊民俗談話会では、大島建彦先生はじめご出席の皆様方から貴重なご助言と励ましのことばをいただきました。記して御礼申し上げます。

表1

番号	氏名	性	集落	生年		先祖の出身地（　）内は本人の出身地	呼称	使用時期	質や分布の認識	入手			採掘		
				元号	西暦					時期	方法	場所	目的	主体	道具・方法
①	A	男	金曲	大正12	1923	津軽地方	サルケ データン	戦後ころまで	場所により質が異なる。燃えるものもあれば燃えないものもある。	春	採取	田	燃料入手 土地改良	一家総出	表土をのぞき、タヂで切れ目、専用トガで採掘後、土を戻す
②	B	男	金曲	昭和4	1929	新和村小友 ※大正期	サルケ データン	昭和10年代後半ころまで	山手に600～700メートル分布。表土も質が悪い。	春先	採取	田	燃料入手 土地改良		表土をのぞき、タヂで切れ目、クワやトガで採掘
③	C (D)	男	金曲	昭和9	1934	金木	サルケ		4-5線以下がツヂのない泥炭がとれる。金曲では2尺程度だが、大曲に行けば10尺程度もあると認識。大曲のほうが深い。田名部のヤヂマヂも深い。	秋	採取	田	燃料入手 土地改良	採取は男性、運搬などに女性や子どもが参加	タヂで切れ目、トガで採掘後、土を前の列に戻す
④	E	女	大曲	大正15	1926	五所川原	サルケ	昭和20年ころ採掘	表面の「ツヂ」の下にサルケがある。堅いものと、柔らかいものがある。堅いものがよい。理由は、固形燃料として形を維持しやすいから。	春	採取	田	燃料入手 土地改良	男女ともに採取。女性がタヂ入れも	サンボンカとスコップで表土を除去、タヂで切れ目、モッタで採掘後、土を戻す
⑤	F	女	大曲	昭和21	1946	金木町嘉瀬		利用せず					土地改良		
⑥	G	男	大曲	昭和25	1950	下北地方	サルケ	昭和35年前後まで	サルケとは草の根である。		採取	田		大人が採取、子どもは運搬を手伝う	
⑦	H	男	大曲	昭和22	1947	五所川原	シギボ サルケ	昭和20年代末ころまで	シギボは上側の土。 サルケはその下のカヤの根（草の根）。	春	採取	田		子どもの頃、採取や運搬を手伝う	タヂで切れ目、モッタで採掘。子どもはスコップで採掘
⑧	I	女	大曲	昭和29	1954	（脇野沢）	サルケ		「サルケ田」の下はみなサルケがあるはずだ。	春	—	田			
⑨	J	女	大曲	昭和11	1936	（横浜町）	サルケ	昭和27-28年ころまで			譲渡	田			表土を除去し、タヂで切れ目を入れ、採掘
⑩	K	男	大曲	昭和9	1934	中津軽郡 笹舘村	サルケ	昭和18-19年ころまで					燃料入手 土地改良	手伝ったことはない	
⑪	L	男	大曲	昭和20	1945	鶴田町水元 ※大正～ 昭和初期	サルケ	昭和20年代ころまで		春	採取	田	土地改良		表土を除去後、タヂで切れ目、トガで採掘後、前列に土を戻す
⑫	M	女	大曲	昭和11	1936	津軽地方	サルケ	昭和31-32年頃	道路を挟みL氏の家屋の建つ側、つまり西は砂土、東はサルケ。「サルケ田」と称した。	春先	採取	田	燃料採取		タヂで切れ目、サンボンカ、トガ、スコップで採掘
⑬	N	男	大曲	昭和17	1942	車力村	サルケ	昭和33年頃まで	大曲周辺は泥炭地帯である。	田植え後	採取	田	燃料入手 土地改良	採取は大人、運搬を子どもが手伝う	タヂで切れ目、専用クワで採掘
⑭	O	男	大曲	昭和9	1934	遠山里	サラケ	昭和20年代まで	八忠溜池周辺の泥炭層が厚い。深さ最大20メートルになると認識。泥炭の分布に重なるように田が分布し、住宅あたりは砂土と認識。		採取	田	燃料入手 土地改良	乾燥時のひっくり返しを子どもが手伝う	タヂで切れ目、大きなクワで採掘
⑮	P	男	大曲	昭和21	1946	母方：津軽 父方：山形や新潟方面	サルケ	昭和33年ころまで	1メートルくらい、植物の根が張っているものがサルケである。自宅の下は砂地だが、東側に向かうとサルケである。	春	採取	田	燃料入手 土地改良	運搬を子どもが手伝う	タヂで切れ目、モッタ、サンボンカ、スキ、カヴスコップで採掘
⑯	Q	女	大曲	昭和10	1935	（むつ市大曲）	サルケ		嫁いだ頃には使用していた	田植え前	採取	田	燃料入手 土地改良	男女ともに採取。男の子は手伝った	表土を除き、採掘
⑰	R	女	大曲	昭和5	1930	鶴田町	サルケ	昭和25年以前			採取	原野	土地改良	男性が採取。自らは採取せず	
⑱ A	S	男	大曲	大正11	1922	母方：車力 父方：飯詰	サルケ		大曲から土手内の区間にもっともよくサルケが分布していると考えている。		採取	田	燃料入手	6-7歳で運搬、15歳頃採掘	表土を除き、タヂで切れ目、オゴシクワで採掘
⑱ B	T	女	大曲	昭和5	1930		サルケ	昭和16-17年ころ	採れる場所と、採れない場所がある。農免道路のある方面がよく採掘できた。男性の仕事。	秋？	採取	田	燃料入手 土地改良	採取は男性	表土を除き、タヂで切れ目、モッタのようなクワで採掘後、土を戻す
⑲ A	U	女	大曲	昭和10	1935	父方：青女子 母：大曲 義父：百沢	サルケ		表層は黒土、地下60cm程度で土混じりのサルケ、100cmでサルケの層となり、200cm以上では砂層となると認識。深いほど良いサルケ。		採取			採取は男性	表土をスコップで除き、タヂで切れ目、サルケ専用クワで採掘、土を戻す
⑲ B			土手内				サルケ	昭和28～29年ころまで	※人手のある家では秋にも	春※	採取	田	土地改良	採取は男性	
⑳	V	女	土手内	昭和9	1934	（大畑町）	サルケ	昭和34年頃には1軒で使用していた	サルケとは、草の根が木の根とからまっているもの。	刈入後？					表土を除き、採掘
㉑	W	女	土手内	昭和3	1928		サルケ	幼少時						男女ともに採取、乾燥は女性	
㉒	X	女	土手内	昭和6	1931	（むつ市土手内）	サルケ			田植え後	採取	田		運搬を女性	タヂで切れ目、スコップやクワで採掘
㉓	Y	女	土手内	昭和13	1938	（横浜町）	サルケ	昭和32年時点では見ていない							
㉔	Z	女	土手内	昭和11	1936	（弘前市）	サルケ	昭和33年時点では見ていない							
㉕	α	女	土手内	昭和13	1938	（北海道岩見沢市）		昭和42年時点で見ていない							
㉖	β	女	土手内	昭和8	1933	（むつ市最花）	サルケ								
㉗	γ	女	土手内	昭和15	1940	（むつ市土手内）	サルケ	昭和36年時点で見ていない							タヅで切れ目、幅広のモッタクワ採掘
㉘	δ	女	土手内	昭和18	1943	（東通村）	サルケ	昭和41年時点で見ていない							
㉙	ε	女	土手内	昭和3	1928	（下北郡内）	サルケ	昭和25年には殆ど使われず			採取	田	土地改良		表土を除き、タヅで切れ目、採掘
㉚	ζ	女	土手内	昭和11	1936	（東通村）	サルケ						土地改良		表土を除き、キッカゲ、ツグスなどで採掘し、別の土を客土
㉛	η	女	上川町	昭和11	1936	（むつ市中心部）	サルケ					田			
㉜	θ	男	土手内	昭和9	1934	岩手県九戸郡山形村	サルケ シグボ	昭和29年から使用開始	サルケの層の上側にある10cmほどの層がシグボ、その下にサルケがある。両者は別ものである。	4～5月	採取	田	土地改良と燃料入手		タヂで切れ目、専用のトガで採掘
㉝	ι	男	土手内	昭和22	1947	南部地方	サルケ	昭和30年ころには衰退	草などが積み重なっているもの。		採取	畑	土地改良		
㉞	κ	男	昭和町	昭和17	1942	（むつ市中心部）	サルケ	昭和27-28年頃利用実験			採取				

	乾燥・運搬・保管	用途					火の操作	副産物		その他
サイズ		暖房の燃料/設備（用具）	炊飯の燃料/設備（用具）			他	（　）内は火力について	煙・ニオイ・煤	灰	
7寸×7寸×7寸	1週間の一次乾燥、3～4分割後完全乾燥。ニオ積み保管	サルケ	（こたつ）	サルケ	炉		柴の上にハの字の立て着火（火力大）			現在は、水田に牧草をつけている。
30×20×6～7cm	正方形レンガ積み、秋運搬、小屋収納	サルケ	ヒボドに手製ドラム缶ストーブ	サルケ	ヒボドに手製ドラム缶ストーブ（鍋）	風呂焚き	割って盛り上げ着火（火力大）	ストーブに煙道なし。煙のニオイ		昔は木がなかった。
20-15cm ×30cm、厚さ12～13cm	五画形ハイヅミ、乾燥後に大きく本積み、小屋へ運搬	サルケ流木	イロリ→S20頃手製ドラム缶ストーブ	サルケ流木	イロリ→S20頃手製ドラム缶ストーブ		手割りしたものを積み上げ着火（火力は強くない）	燻製のようなニオイ。特殊なニオイ。煙突のあるドラム缶ストーブで解消。	畑に撒いた。雪消しにも使用した。	乾燥前のものを「ナマ」と表現。
1尺×1尺	採取したものを３分割で三角形に立てて乾燥、小屋で保管	サルケ枯れ枝2：1	イロリ→既製薪ストーブ	サルケ枯れ枝1：1	イロリ（鍋）→既製薪ストーブ（鍔釜）		着火時に木を使用（炊飯は枯れ木で火力調整）（火力大）	集落全体にニオイが漂っていた。家の中のホコリ（灰）がひどい。煙は煙突から排出。	田畑の肥料に用いた。余分は捨てた。	乾燥前のものを「ナマ」と表現。姉の家では田の下には埋没樹木があり、ノコ引きして利用。
		粉炭石炭薪	ストーブ	他家では手製ドラム缶ストーブも使用（見聞）						
30～50cm四方	乾燥させ、降雪前に家へ運搬	サルケ	既成薪ストーブ	サルケ	既製薪ストーブ（鍋）			煙は煙突から排出。熾のようなニオイ。	サルケを燃やすと、灰が大量に出た	
30～50cm四方、厚さ10cm	田のクロにレンガ積み、モッコで道路へ、降雪前に家へ運搬	サルケ	ロブヂ→S35頃ストーブ	サルケ	ロブヂ→S35頃ストーブ	風呂焚き		火事のようなニオイ。学校でニオイを指摘された。		
30cm程度か	田のクロで乾燥、小屋へ運搬	サルケ→石炭→石油	薪ストーブ→石炭ストーブ→反射式石油ストーブ	サルケ薪	薪ストーブ（鍋）			焚いている家の前を通るとニオイがした。漬物のニオイが学校で気になった	イモを植える時に利用した	サルケはみんなが使っていたわけではなく、自分たちのように貧しい人が使っていたと認識
	田で乾燥	サルケ	ロバダ					煙は出るが、草屋根のためそれほど気にならなかった。		昔はリンゴ畑と田が多く、道路沿いでは畑作がおこなわれていた
30cm×30cm、厚さ25cm	田で乾燥後田のクロに寄せ、家で二次乾燥	サルケ松の木の根	既製薪ストーブ	サルケ	既製薪ストーブ		手やナタで小割りして燃やす（火力大）	煙突があったので気にならなかった。	シノをかけて保管し、畑に撒く。ジャガイモの栽培、ジャガイモのあく抜きなどに使用。譲って欲しいという人も。	津軽地方の田はぬからない良い田だと認識。
50cm×50cm、厚さ20cm	間隔をあけて5～6段に円形に積み上げ乾燥、収穫後運搬。	サルケ薪	イロリ	サルケ薪杉の葉	イロリ（鍋）→手製ストーブ。家畜飼料も煮た		着火後は操作なしで28時間以上持続する	ひどい煙でメクサレ（眼病）になった。大曲の人は臭い、メクサレだと言われた。	灰置き場に保管、田に肥料として撒く	藤田千吾に言及。
厚さ15～20cmの四角形				サルケ十薪	カマド、薪ストーブ		炊飯時は薪を併用し火力調整	泥臭いニオイ。体に染みつき、いじめられた。家中が煤で真っ黒だった。		採掘跡にドジョウよく入った。食べなかった。商売のためにドジョウを捕る人が町から来た。
	—	サラケ	ロバダ	サラケ	ロバダ（炊飯にはあまり使用せず）		盛り上げて燃やす。持続力がある。	室内に煙が充満し、目に染みた。町の人は大曲に来るとニオイがすると言った。		家から藤田千吾の墓が見えると説明。サルケ採取の際にコイやフナを捕ゑ、自宅の池に放った。
40cm×30cm、厚さ10～20cm	三角形に立てて乾燥後、ハイヅミで乾燥、モッコで運搬し家に積み保管	木炭ジャッパ	ブリキのストーブ（ロブヂに設置）	サルケ	手作りカマドで煮炊き		着火時に杉葉を併用、ナタで小割してくべる	煙が出るのでロブヂでは使用しなかった。	利用せず捨てる	Q氏が、農業機械を先駆的に導入し、このあたりの人たちは世話になった。
30cm×25cm、厚さ10cm	間隔をあけて5～6段にレンガ積みし田のクロで乾燥	サルケ	ロブヂ	サルケ	ロブヂ		長めの薪と併用して火持ちをよくする	煙がもうもうと出て臭いが慣れた。家が煤けた。		
		サルケ	炉（小屋）	薪	薪ストーブ			煙突がなく、室内に煙が出た。どこで焚いてもニオイでわかった。		
	田で乾燥させ、円形の「ニオ」積み、冬に家に運搬			サルケ	熾火で淡水魚の串刺し、味噌貝焼き		枯れ木の上にサルケを立てて着火	集落に入ってくるとニオイで分かったと思う。煙のメリットはない。	畑に撒く	藤田千吾に言及。津軽の田はよいと認識。先祖の出身地を見るために車力方面に旅行。
1尺×1尺、厚さ10cm	水切りの後、田のクロで一次乾燥、高い場所で二次乾燥、その後家へ運搬	サルケ	ロブヂ→粉炭ストーブ	サルケ	ロブヂ（鍋）		割ったサルケに多少の枯れ枝を加えて着火	非常に煙たく、家の中は煤けてしまった。しかし煙が暖かかった。		サルケはとてもよいものだったと考えている。
30cm×15cm、厚さ10～15cm	円形に積み上げて乾燥									
		サルケ埋没樹木	炉/手製トタン筒型ストーブも試作	サルケ	炉熾火で魚、イモ、ソバモチの調理	風呂焚き	着火には少しの薪を使用（火力大）	他村へ行くとニオイを指摘された。ストーブに煙突がなく、屋内に煙が排出された。煙で目が赤くなった。		サルケを使っていたのは、集落内ではそれほど多くなく、5-6軒程度だった。埋没樹木も利用。
40cm×25cm×15cm	田でレンガ積み、人の背丈よりも大きい程度に積み上げ	※粉炭						ニオイが染みついているので、盆踊りの輪に津軽衆が来ると「サルケカマリの子ができる」と盆唄でからかうことがあった。		
		サルケ		サルケ	炊飯		炭の上にサルケを置いて焚いた	煙がひどかった。箒に煤がついた。ニオイは臭かった。他地域の人から、ニオイのことを多くの人が言われていたのではないかと認識。		
1尺四方、厚さ10cm程度	円形に積み上げて乾燥、家へ運搬	サルケ	炉	サルケ	炉に鍋			部屋に煙が充満し、煤だらけになった。目も悪くなった。治癒を祈願して神社に参る人もあった。		
（※1尺四方、薪もしくは粉炭を、薪を敷いた上に積む。ハイヅミは円形薪を本積みに積む。ハイヅミ）		※薪S32		※薪S32	（※1尺四方、薪もしくは粉炭を、薪を敷いた上に積む。ハイヅミは円形薪を本積みに積む。ハイヅミ）			土手内でサルケを見たとき、燃やすと煙が出て「すごかった」という記憶がある。		本人はサルケを使ったことはないが、土手内出身の父親に連れられて見たり聞いたりした。
	互い違いに積む	※薪S33	薪ストーブ	※薪S33						サルケを使ったことはないが、嫁ぎ先の義父から聞いた。
		※薪S33	薪ストーブ	※薪S33						サルケは使ったことも見たこともない。使っていたという話も知らない。出身地では石炭を使用
		※薪S26	炉	※薪S26	炉（鍋）→薪ストーブ（ツバガマ）					使ったことはないが、見たり聞いたりした。
		※薪S36	薪ストーブ							隣の家の人が採取しているのを見た。
	互い違いに積む（大曲での見聞）	※薪S41	薪ストーブ					ニオイがした。		サルケを使用したことはないが、小学校の頃に、分家のある大曲で見た。
	互い違いに積む	サルケマギ	田植え時の採暖	サルケマギ	ジャガイモを焼く（伝聞）			実家に帰ると、サルケをさかんに使う土手内に嫁いだε氏に「サルケください」とからかう人もあった。		
										使用したことはないが、田で採掘しているのを見た。
	富士山のようにレンガ積み	サルケ		サルケ				集落に来るとニオイがした。		姉一家が土手内にいたので、行き来があったため、サルケを見た。
1尺2～3寸×1尺×1尺	ひっくり返しながら観戦乾燥、円形に積み上げて保管	薪サルケS29～	炉→ストーブ	薪埋没樹木	炉（鍋）→ストーブ	堀を塞ぐ	タヂで2寸ほどに小割りして焚く	たき火のようなニオイがした。屋内は黒いペンキを塗ったように煤けた。	肥料に使ったのではないか	秋田方面から来た人が、炭窯をつくり、炭焼きをした。1年ほどでなくなった。
		サルケ	田での採暖	サルケ	炊飯？			もうもうと煙が出た。防虫によいが、目を悪くすると考える。		
		薪	イロリ	薪	イロリ（鍋）					
厚さ10cmのレンガ状		（サルケ）	（父親が実験的利用を試みる）							K氏は土手内の住民ではないが、矢立方面でサルケの利用実験を経験。

注

2) 「泥炭」について『新版地学事典』(地学団体研究会 新版地学事典編集委員会編,平凡社,1996) は「湖沼,河川の後背湿地など排水不良地に生育する草本・樹木類およびコケ類などの遺体が,還元状態で堆積した未分解の有機物質」と定義する。泥炭のなかでとくに草本類を主体とするものを「草炭」という場合があるが、これも「泥炭」である。津軽地方と秋田県横手地方の泥炭の利用について報告している野本寛一は、サルケについて「津軽平野のサルケは母植物に草本類が多い点から草炭と見ておく」、「横手盆地のネッコは松の幹などが出るところから泥炭と称してもよかろう」と述べ、木質に富むものを「泥炭」とし、「草炭」とは区別して用いている(「平地水田地帯の民俗ー津軽の『サルケ』を緒としてー」)。また、松木明はサルケを「泥炭、草炭」であるとし、「炭化の最も低い暗褐色の土塊状のもので、蘚苔類、イネ科の植物などが湿地に堆積して変成したもの」と定義している(『弘前語彙』)。こういった解説を参考に考えると、田名部低地の泥炭はとくに「草炭」とよばれるものに相当すると言えるかもしれない。「かつて樺山地域に草炭地があり、一時採掘されたことがあった」「厚さ５ｍほどの草炭層」(『むつ市史自然編』)という記述もある。しかし、本稿の目的からすれば「草炭」という用語をあえて用いる理由はないので、「サルケ」を一般名称に換言する際には「泥炭」という用語を用いた。筆者は科学的分析をおこなったわけでもなく専門的知識も皆無である。厳密な用語(術語)としてではなく、本稿ではあくまで一般的に使用されるレベルのことばとして使用している。また、人々が「サルケとはデータンである」と説明するケースが度々あったが、この場合、話者は「データン」ということばを科学的な根拠にもとづいて用いているわけではない。周囲でおこなわれている言説を借用しているに過ぎない。それは「サルケ」ということばと同様、そのように呼び習わされていることばであり、一種の民俗語彙である。発話行為の中で用いられる場合には「データン」と表記した。

3) 拙稿2015「青森県岩木川流域におけるサルケ(泥炭)の利用」(「青森県立郷土館研究紀要第39号」pp.63-102)

4) 松井健、坂口豊1956「田名部低地帯の泥炭土の発達史,断面形態および二・三の物理的性質」(「資源科学研究所彙報第40号 下北半島の開発に関する綜合的研究pp.41-60)、松井健、大竹一彦1957「田名部低地帯の泥炭度の発達史,断面形態および二・三の物理的性質(続)」(「資源科学研究所彙報第43-44号 下北半島の開発に関する綜合的研究Ⅱpp.79-92)、田名部町1957『田名部町土壌調査報告書』(執筆者:松井健)

5) むつ市史編さん委員会編1989『むつ市史自然編』むつ市p.154

6) 山田秀三1957『東北と北海道のアイヌ語地名考』p.32

7) むつ市史編さん委員会編1986『むつ市史 民俗編』むつ市pp.102-103 当時の平均反収は２～２俵半であったという。

8) むつ市史編さん委員会編1989『むつ市史 自然編』むつ市p.25,p.143

9) 青森県立郷土館1988『奥内の民俗 調査報告書』p.64

10) 近川開拓百周年奉賛会編1995『近川開拓百周年記念誌 我が郷土の百年の歩み』近川開拓百周年奉賛会p.36

11) 工藤宏1997「先祖『工藤兼吉』を語る」(大曲開拓百周年実行委員会編1997『大曲百年誌』大曲町内会p.88)

12) 田名部町1956『田名部町土壌調査報告書』田名部町pp.10,26、むつ市史編さん委員会編1989『むつ市史自然編』むつ市pp.23-26&142-147,154

13) 同書p.16 14)同書p.16

15) 尾崎竹四郎編1969『青森県人名大事典』東奥日報社,pp.579,581 なお、『大曲百年誌』には藤田千吾と父千次郎は、維新後に開発地である豊富字千貫へ移住し、造り酒屋を営んだとも、千次郎は安政元年に同地へ移住したとも記される。

16) 14-27行までは、大曲開拓百周年実行委員会編1997『大曲百年誌』大曲町内会(青森県)p.1,16,17,24,54 を参考に記述。

17) 前出 むつ市史編さん委員会(1986)p.103,および 大曲開拓百周年実行委員会編1997『大曲百年誌』大曲町内会(青森県)p.17

18) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編1985『角川日本地名大辞典』角川書店p.1112 19)東奥日報社1986「町内拝見」第237回

20) 佐々木多市「苫部野を切り拓いた人々」(むつ市立第三田名部小学校創立30周年記念誌委員会編1979『拓魂無限』むつ市立第三田名部小学校創立30周年記念事業協賛会)p.29。著者佐々木多市は、近川を開拓した佐々木弘造の孫にあたる(婿養子)。

21) 前出 田名部町(1956)p.11 22)前出 大曲開拓百周年実行委員会編(1997)pp.62-63(二本柳嘉一郎氏の追想から)

23) 前出 田名部町(1956)p.31 24)松井1955『田名部町土壌図』 25)前出 佐々木多市(1979)p.29

26) 静岡県藤枝市でもソブ(泥炭)について表現する場合、乾燥する前のものを「ナマ」のものと表現する人があった(2015年,筆者取材時)。

27) この部分のみ2016年1月30日の訪問および31日の電話取材で確認した内容。

28) 明治30(1897)年を開拓の始まりとし、平成9(1997)年に開拓100年を祝して記念誌の発行や大曲コミュニティセンターの建設がおこなわれた。

29) 八忠商店所有の農地用の溜池。大曲地区の人々の多くが八忠の借子であったという(前出、『むつ市史』p.115)

30) 前出 むつ市史編さん委員会(1986)p.808 31)青森県史編さん民俗部会編2007『青森県史 民俗編 資料 下北』p.445

32) 前出 むつ市史編さん委員会(1989)pp.142-143 33)前出 田名部町(1956)p.16

34) 坂口豊1974『泥炭地の地学』東京大学出版会,p.30,pp.48-52 35)前出 田名部町(1956)p.15,pp.48-49

36) 「簡単に焚き物が手に入らないこの地区の人たちにとって」(『再賀の民俗』)「薪を入手するのが困難であった。それで(利用した)」(『青森県史資料編 民俗 津軽』)「薪が手に入りにくいので」(『五所川原市史史料編Ⅰ』)「焚きものが乏しい土地柄(だから利用)」(『陸奥の伝説』)など。

37) 江渡益太郎ほか1969『五戸町誌』五戸町誌刊行委員会,p.129。シクボ開墾の方法については能田多代子1969『みちのくの民俗』津軽書房,p.64

38) それ以前に下北地方ではまったく稲作がおこなわれていなかったということではなく、稲作が盛んになる転機となったという意味である。

39) 前出 むつ市史編さん委員会編(1989)p.25,154 40)青森県史編さん自然部会編2001『青森県史 自然編 地学』青森県p.104

41) 具体例については拙稿(2015)p.90参照。